

伝統芸能「北海道」のあゆみ

尺八篇・その1

北海道鈴慕会の

黎明から基盤の確立まで

中島 聖山

はじめに

江戸時代に普化宗の法器として虚無僧達に独占されていた尺八は、明治4年の普化宗の廃止によって楽器として扱われることとなり、一般の人々にも広く演奏されるようになった。北海道で尺八が盛んに演奏されるようになったのは、各流派の家元や専門家の相次ぐ来道により刺激を受けた大正時代の終わりにから昭和時代の初期にかけてである。

なかでも鈴慕会会主の青木鈴慕が渡道し1年間札幌に移り住んだことは、北海道の尺八界に大きな影響を与え、ひいてはその後の北海道邦楽界を一変させたといっても過言ではない。そこで尺八篇を書き始めるにあたり、まず最初に北海道鈴慕会の誕生とそのあゆみをさぐってみることにする。

北海道鈴慕会の黎明

初代青木鈴慕である青木誠造は、青木仁峯（じんぼう）の四男として、明治23年7月15日に横浜市野毛町3丁目で生まれた。父、仁峯が江戸末期に京都仁和寺で琴古流本曲を習得し、明治維新後に横浜で開軒していたこともあり、誠造は長兄聡次らとともに幼少の頃から父に師事し尺八を学んだ。才能に恵まれ

ていたとみえ明治41年、青木誠造は18才の若さで長兄聡次が築いた鈴慕会を継承し、横浜を中心に活動を始めた。尺八の教授や演奏だけでは将来に不安を感じたのか、尺八を吹くかたわら楽器・楽譜・蓄音機などを扱う楽器店を経営していた。また、当時の雑誌「三曲」に載せた広告等から、兄の地盤だった東京市芝区三田四国町1丁目の慶応前にも店舗をかまえていたのではないかと思われる。

大正12年9月1日の関東大震災のとき青木誠造は横浜にいたが、店員一人が焼死したものの家族一同は無事難を逃れた。冬をまちかにし、焼け野原となった東京周辺では生活できないと判断した青木誠造は、雑誌「三曲」の主幹だった藤田俊一のすすめで、遠藤操琴をつてに来道し、札幌市南4条西3丁目に一家で移り住んだ。ときに青木誠造33才の年である。

当時、遠藤操琴は新開地北海道の邦楽振興に大きな夢を抱いて活動したところで、おりよく大正11年秋に札幌市南3条西10丁目に国風音楽奨励会の分教場を開設したばかりだった。藤田俊一とはじっこの間柄だったとみえ、文通も頻繁に行われているし、震災のあった12年の春、5月20日には上京して藤田俊一・中島利之らと一夜痛飲しているのが藤田俊一も紹介しやすかったであろう。

地元の邦楽界に詳しい遠藤操琴を通じて、青木誠造の実力は札幌のアマチュア尺八家達に伝わったのであろう。青木誠造は時を待たずして多くの門人を抱え、尺八教授に忙しい日々を送ることになった。恐らく東京にいた



初代青木鈴慕



札幌・日専連・北専・札幌版・HCB
オリエント・セントラル・ミリオン
をご利用下さい。

邦楽邦舞の店 株式会社 キリヤ楽器店

札幌店 札幌市豊平区平岸3条15丁目2-20
TEL 011-823-6164
旭川店 旭川市3条通7丁目右70号
TEL 0166-22-2302

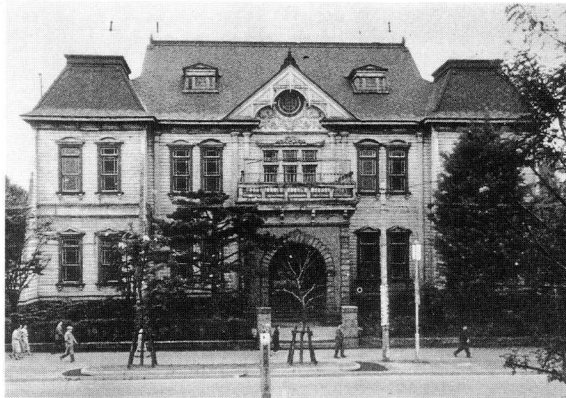


■営業時間＝午前10時～午後6時30分
■定休日＝水曜日

時より門人の数は多かったであろう。大都會に生まれ育った青木誠造にとって、人口わずか15万人の当時の札幌は田舎そのものだったに違いないが、藤沢栄七らを始めとする熱心な門人達に出会い、新たな夢と希望も生まれはすである。

初めての演奏会

来札して半年程たった大正13年5月25日には、札幌鉄道倶楽部で妻の青木鶴子・遠藤操琴らと共に鈴慕会として演奏会を行っている。これが今は冠たる鈴慕会の北海道に於ける最初の演奏会だった。その後、大正13年7月には札幌市南5条西3丁目へ移転している。



札幌鉄道倶楽部(1908) 日本建築学会北海道支部編「北海道の建築1863-1975」(昭和50年、丸善)より

熱心な弟子達がどれ程いようと、都会育ちの青木誠造にとって、知己のない北国の生活は苦痛だったに違いない。大正13年7月に上京した青木誠造は、14日に美妙社を訪ねし藤田俊一に会って近況を知らせるとともに、年内には札幌を引き払い上京する旨を伝えている。ラジオや新聞で東京の状態は知りつつも、自分の目で復興の様子や上京後の落着き先などの確認に出掛けたのであろう。

藤田俊一に伝えたとおり大正13年9月には淀橋町柏木197の成子坂下に転居し、青木楽器店を開店するとともに、翌10月からは自宅のほか横浜や三田の道場を開設して東京で

の教授を再開したのである。

青木誠造が帰京した後は、高弟の藤沢栄七が留守を守り門人達を良くまとめていた。とはいっても師範の資格を持たない藤沢栄七の代稽古では、師のようなわけにはいかなかった。青木自身も1年足らずの在札で十分な指導ができなかったことから、札幌に残したままの門人達が心配だったのであろう。翌大正14年8月20日には講習がてら来札している。

その時、藤沢栄七は糸方に横山光喜勢師の協力を得て、青木誠造師歓迎演奏会を9月6日に太平館で行った。太平館は青木誠造が上京前に住んでいた南5条西3丁目にあったので、青木誠造も良く知っていたはずだし、短い期間しか教えなかったにもかかわらず、暖かく迎えてくれる門人達を見て、さぞかし思いに残る演奏会であつたらう。

藤沢栄七尺八専門家を志す

青木誠造と藤沢栄七との出会いは宿命的であり、単なる偶然とはいえない。青木誠造は鈴慕会の地方拡大による組織拡充の引き金になったであろうし、藤沢にとっては尺八専門家を志す契機となり、その後の人生を大きく変えることになったからである。藤沢栄七は大正14年秋に大通西2丁目角に楽器や楽譜を扱う十字屋商店を出した。これも、すでに楽器商としての経験を持つ青木誠造の助言によるものではなかったのだろうか。8月下旬に青木が来札したのも、ひよつとするとそうした楽器店の開店準備の打合せを兼ねていたのではなかったか。

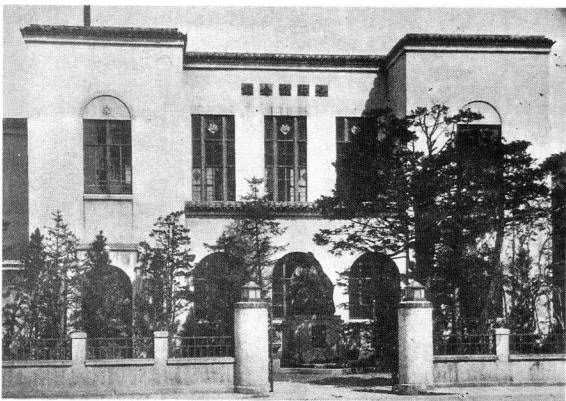
雑誌「三曲」の大正15年1月号に出した鈴慕会の年賀広告には、高弟として北海道では藤沢栄七のほかは鈴木彌三郎(札幌市北2条東8丁目)の名が見える。この時鈴慕会幹部として名を連ねたのは、横浜の太田八郎を筆頭に川崎の渋谷・小宮、小田原の富樫、そして札幌の藤沢・鈴木の名である。

尺八専門家を決意した藤沢は、その後精力的に音楽活動を展開した。大正15年4月11日には小谷義雄や鈴木彌三郎らと太平館で北海道鈴慕会の演奏会を行っている。また、その年の9月5日には東京から青木誠造・村瀬三

之助を迎え、時計台で北海道鈴慕会の演奏会を行っている。演奏会が終わると講習の間もなく、二人はただちに帰京した。それというのも10月10日に東京丸の内報知講堂で行われる東竹演奏会に出演する予定があつたからである。

藤沢栄七ら師範昇格

雑誌「三曲」の昭和2年1月号に載せた年賀広告には、鈴慕会の支部を担うものとして北海道では藤沢栄七と鈴木彌三郎の名があげられている。しかし、いずれも本名を使用していることから、この時点では藤沢栄七もまだ師範を許されてはいなかったと判断される。昭和2年2月27日に今井記念館で行った



今井記念館「(左) 今井泊重と事業の全貌」(昭和15年、日刊土木建築資料出版社)から

北海道鈴慕会の演奏会で藤沢鈴昭の名を初めて見つけることができる。この会には糸方として研華会主会主川親敏の妹である高橋文子や竹森八重子らが出演していることから、藤沢鈴昭の師範昇格記念演奏会だったと推測できる。それというのも昭和2年2月に青木誠造が鈴慕を襲名していることから、これを機に幹部6人を昇格させ、鈴慕会の陣容を固めたものと思われるからである。そうすれば、藤沢栄七とともに鈴木彌三郎も師範昇格し鈴

峯を号したのであろう。先見の明にたけた藤沢鈴昭は門人の対象をそれまでの社会人から学生にまで広げ、北大

ひとすじの糸に、心をこめて……

三味線

琴・三味線の専門店



小玉楽器店

札幌市中央区南2条西8丁目
☎(011)231-8300・241-2560

鈴韻会を結成して尺八愛好家のすそ野を拡大するとともに、時間的に余裕のある若い学生達を中心とした邦楽の地盤を築こうとした。当時、東京では各大学の尺八クラブが盛況だった。昭和2年2月12日には今井記念館で学生達会員を集め、自ら司会をして第1回北大鈴韻会の演奏会を行っている。出演者の顔ぶれからこの会は糸方を入れないおさらい会程度のものであったと思われるが、これが刺激となって学生達の尺八熱があがったのである。5月28日には高橋文子師を糸方に依頼して、今井記念館で2回目の演奏会を行っている。



今井記念館講堂「⑪今井治幸と事業の全貌」(昭和15年、日刊土木建築資料出版社)から

鈴木鈴峯死す

順風満帆で船出した北海道鈴慕会ではあったが、藤沢鈴昭の片腕だった鈴木鈴峯が師範昇格もむなく昭和2年6月12日午前2時10分、不幸にして病死した。青木鈴慕も訃報により急遽来札し、6月21日には今井記念館で藤沢鈴昭・糸方高橋文子らとともに追悼演奏会を開催した。片腕をなくした北海道鈴慕会ではあったが、11月27日には高橋文子の賛助を受けて、今井記念館で恒例の演奏会を行っている。

鈴慕会師範を許されたばかりの藤沢鈴昭であるが、一党一派にこだわることなく、当時東京で新風を巻き起こしていた吉田晴風夫妻

を呼び、北海道各地で新日本音楽を披露した。具体的には昭和2年10月16日今井記念館で行われた吉田師範の歓迎の新日本音楽演奏会を自ら司会したのを皮きりに、10月18日には旭川市4条7丁目のみやこ館で地元三浦栄洲らの協力を得て演奏会を行っている。本来であれば師範昇格を契機に自派の流勢拡大に傾注するはずであるが、新日本音楽協会を組織して新邦楽の普及にあたった吉田晴風を招聘し、演奏会を企画したのである。こうしたところにも藤沢鈴昭の器の大きさと芸に対する一念を感じ取ることができる。

昭和3年1月の鈴慕会会報には免状交付状況として、師範に藤沢鈴昭・鈴木鈴峯、奥伝に橋本昭法・竹森昭漢・小谷洲峰・佐々木昭葉・木村昭韻らの名があげられている。鈴木鈴峯はすでに故人であるから、それまでに発行したもの全てを掲載したと思われる。奥伝の5名はいずれも藤沢門下となっているが、小谷洲峰だけは昭の字が付いていないことから、鈴木鈴峯に師事していたが師の逝去によって、後日転門したものと思われる。

鈴慕会20周年記念演奏会

昭和3年4月1日に東京の帝国ホテル演芸場で行われた鈴慕会20周年記念演奏会には、北海道から藤沢鈴昭が出演し、筆米川親敏・三枝富崎春昇により「青柳」を演奏した。藤沢鈴昭の活躍により北海道鈴慕会は飛躍的に組織を拡大した。昭和3年には札幌西支部(橋本昭法)、札幌北支部(小谷洲峰)、札幌山鼻支部(木村昭韻・小木曾昭英)、札幌ビール会社支部(佐々木昭葉)、札幌北支部(阿部谷人)、小樽支部(竹森昭漢)、上砂川支部(泉武夫)、苫小牧支部(黒住正憲)、根室支部(宮下力之助)、稚内支部(華輪転)、定山溪支部(佐竹清城)と全国13支部中、11支部が実に北海道という状態であり、まさに北海道が鈴慕会を支えているといっても過言でないさまただった。藤沢鈴昭は更に小樽鈴慕会を創設するとともに、昭和3年7月から小樽市稲穂町東6丁目梅月方に教授所を開設して、毎週水曜と土曜の2回通い始めた。そして、その年の9月30日には小樽倶楽部に於いて東京から青木鈴慕と太田

里子の両師を呼んで、小樽鈴慕会創立記念の演奏会を開催した。司会は当時すでに師範に昇格していた小樽市花園町東2-17在住の尾山鈴童が行った。小樽での演奏会の前夜、札幌市公会堂で青木・太田両師歓迎の演奏会を藤沢鈴昭の司会で開催している。

創生期から発展期へ

昭和4年に入るとそれまでの藤沢鈴昭の苦労が一気に結実するかのようになり、各地で演奏会が行われ北海道鈴慕会はまさに発展期を迎えることになった。昭和4年1月20日には藤沢鈴昭を始め師範昇格の橋本昭法、小谷洲峰ら会員による北海道鈴慕会の演奏会が、札幌鉄道倶楽部で行われている。昭和4年4月3日、東京丸の内保険協会で行われた第1回鈴慕会師範演奏会には、藤沢・橋本の両師が揃って出演し、藤沢鈴昭は筆高橋文子・三枝太田里子で「七小町」を演奏し、橋本昭法は箏越野栄松・三枝中能島欣一で「松風」を演奏した。この演奏会には東京を中心に全国から10名の師範が出演した。

東京から帰札したばかりの藤沢鈴昭は疲れもみせず4月14日には小谷鈴峰の師範昇格を祝う会に出演している。この会は北海道鈴慕会が主催し古屋寿美治・新田佐美治らの糸方の協力を得て、札幌鉄道倶楽部で開催された。また、6月22日には北大鈴韻会の演奏会が、鈴慕会会員を中心にして今井記念館で行われた。鈴慕会の組織拡大とともに、地方での演奏会も企画実施されるようになった。7月7日には尾山鈴童の司会で戸田北州・石川・佐藤らにより、小樽西島ビル階上にて小樽鈴慕会の演奏会が行われた。7月14日には上砂川の三井鉱業所倶楽館にて上砂川支部の演奏会が盛大に開催された。この会には地元の泉鈴樹・萬屋鈴楓・星井昭浩のほか、札幌からは藤沢鈴昭が出演した。続く9月28日には東京から青木鈴慕を呼び札幌鉄道倶楽部で藤沢鈴昭の司会による演奏会が行われている。このように青木誠造が来札して以来6年目にして、師範昇格の会員も増え各地方に中核となる活動家が現れる等して、藤沢鈴昭を中心とする北海道鈴慕会の基盤が完成したのである。

お求めの音づくり

タクザン
澤山 銘尺八

尾崎 沢山

〒108 東京都港区芝浦4丁目2-22

東京ベイビュウ213 ☎03-5476-4277

田町駅(山の手線・京浜東北線)歩9分

三田駅(地下鉄・三田線・浅草線)歩12分

〒005 札幌市南区澄川4条9丁目4-10

☎011-582-8119

伝統芸能「北海道」のあゆみ

都山流の進出

中島 聖山

前号では、北海道鈴慕会の誕生とその歩みについて述べたが、尺八篇・その2では都山流がどのような経緯で北海道に入ってきたかについてさぐってみることにする。

同好会で始まった都山流

明治29年に大阪の天満此花町で中尾都山が創始した都山流が、北海道各地に根づき普及し出したのは、大正の時代に入ってからである。

北海道都山流の源流ともいべき動きは、官民一体となった北海道開拓の流れに沿って、函館・室蘭・小樽・札幌・夕張等の商業都市に誕生した。本州各地から新開地に夢と希望を胸に集まってきた青年達の中には、すでに都山流を学んでいた者もいた。しかし、当時の北海道には指南の資格を持った、いわゆる師匠がいなかったことから、志を持った青年達は各地に同好会を結成して、互いに切磋琢磨することにより、望みを保とうとしていた。

その中でも、函館の青士会は後述するよう



始祖 中尾都山

りでなく、宗家の心をも動かし、本部の運営にも多大な影響を与えた。

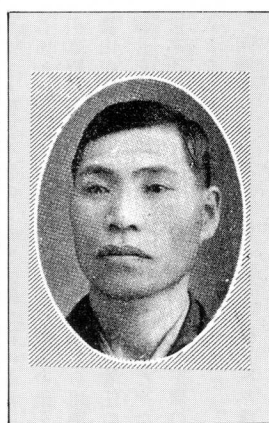
青士会を始めとする各地の同好会のパイオニア精神に基づく、活発で創造的な活動は高く評価され、函館の竹田侃一郎が全国最初の師範礼遇に選ばれる要因にもなったのである。

更に、北海道都山流誕生の特色を挙げるとすれば、各地とも医者を生業とする人達によって同好会が支えられ、発展したことである。函館の竹田侃一郎・三上理啓・平野雄三郎・用瀬霊山は皆医者であるし、札幌の西風福一や夕張の大内出らも医者だった。

退職して勉強した村垣容山

日本製鋼所室蘭工場に働く人達を中心に、昭和に入ってから室蘭の邦楽界は全盛期を迎えるが、その礎を作ったのが都山流の村垣容山である。

村垣容山（本名は岩太郎）は香川県木田郡平井町の人で、普通寺野砲第11連隊での兵役を終え、大正3年5月に日本製鋼所室蘭工場に勤務するため来道した。幼少の頃から尺八音楽を愛していた彼は、社会人になったら師匠について、本格的な修業を積もうと志していた。彼は着任早々、室蘭を始め近隣都市に師



村垣容山

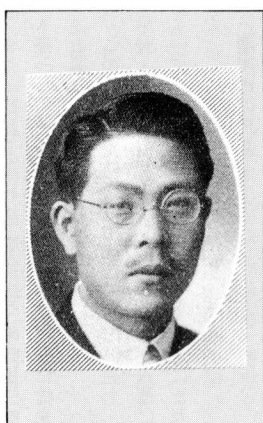
尺八篇その2

匠を捜し求めたが、残念なことに当時北海道には都山流尺八を教授できるものはいなかった。落胆した彼は、ようやく慣れてきたといってもいい北海道の生活や仕事を捨て、大正5年5月に師匠を求めて一人大阪へ旅立った。

大阪で中尾都山直門の鈴木建山に師事して、念願の尺八修業に入ったのである。彼の夢は一日も早く指南免許を取り、再び北海道に戻って教授を開始することだった。努力のかいあって、大正8年には指南免許を受け、同年6月再び来道して日本製鋼所室蘭工場に復職した。信念を貫き通し夢を果たした人だけに意思も強く、「都山流尺八指南」の看板をあげ、室蘭を中心に都山流の普及発展に尽力し、北海道都山流の基盤作りの一翼を担ったのである。これが北海道における都山流指南の始まりである。

函館に青士会結成

来道こそ室蘭の村垣容山より一年遅れたが、都山流創成期の確固たる基盤作りに貢献したのが、函館の竹田侃一郎である。彼は長野県更級郡信田村の人であるが、東北帝大医学部在学時代から都山流尺八を学び、大正4年に函館市立病院内科医として渡道した。活動家だった彼は、函館に転居と同時に同好の士を集め、都山流青士会を結成して活動を始めた。



竹田侃一郎

また、会員のレベル向上のため、自ら大阪まで何度も出掛けて中尾都山に教えを受けたりもした。大正6年、彼の提案で流派遣により、仙台の専門師匠だった細田揚山が来函し、約一ヶ月間講習会を開いた。これが宗家主催の本部講習の始まりであり、以後全国に広ま

五番館
SEIBU

火曜日定休 電話: 011(251)0111 総合案内
全館夜7時まで レストラン夜10時まで年中無休

世界の店で、日本の店で、いつもの店で。
《セゾン》カードインターナショナル。

VISAかマスターか選んで世界中いろんなところで使えます。
国内のセゾングループ各店、セゾン加盟店で、サインひとつでショッピング。
海外にお出かけの際には、世界中のVISAまたは、マスターの加盟店でご利用になれます。海外ATMでのキャッシングもご利用いただけます。

ただいま新会員募集中。

■お申し込み・お問い合わせ B館7階=セゾンカウンター



るとともに、地方流人の資質向上に大きな成果を上げる結果となった。

向上意欲に燃えた竹田侃一郎を中心とする青士会の面々は、これにも満足せず宗家に嘆願して、大正8年7月には宮本頌山を派遣してもらった。

専門師匠来る

宮本頌山（本名房三郎）は香川県の人で、岡山和気島庸山に師事して、大正4年に指南免許を受けたが、大正7年2月不幸にして和気島庸山が早世したため、その後は中尾都山直門となって活躍していた人である。

函館から、専門師匠派遣の要請があった大正7・8年頃は、都山流といえども大阪周辺を中心に50名余りの准師範がいる程度だった。そこで人選に困った中尾都山は、直門になつて間もない指南格の宮本頌山に依頼し、渡道を決意させたのである。

長い間の念願がかない、函館は大喜びで宮本頌山の受入れ準備を進めた。勿論、それらは青士会の責任者である、竹田侃一郎によって行われた。宮本頌山は来函と同時に、すでに用意されていた相生町の魚屋の2階を借り、そこを住居兼稽古場として「都山流尺八指南」の看板をあげた。これが、室蘭に次ぐ2番目の尺八指南所である。

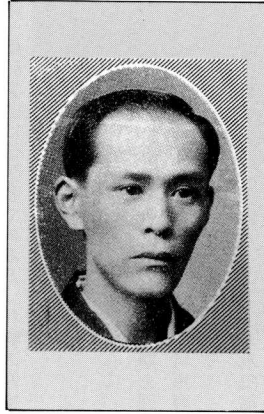
陣容が整い、函館を中心に流勢拡大の一片が高々と掲げられるかに思えたが、あいにく宮本頌山は病気がちで、郷里の四国に帰って養生することが多く、その間は相変わらず竹田侃一郎が代稽古を努めなければならなかった。医者という要職につきながらも、貴重な時間をさいて邦楽に情熱を注いだのは、妻が山田流箏曲の名手で、彼の意を汲み協力してくれたからであらう。なにしろ医者の少ない時だっただけに、往診を終えて稽古場に着的頃には、夜も9・10時になり、それから稽古を始めると終わるのは夜中になることもしばしばだったというから、並み大抵のことではなかった。

用瀬霊山の着任

宮本頌山の長期不在期間も、こうした竹田侃一郎の献身的な努力によって、青士会の活動は絶えることなく続けられた。しかし、い

つまでも師匠不在のままで活動続けるわけにもいかず、大正11年秋には宮本頌山の後を引き継ぐため、宗家の命を受け舞鶴から用瀬霊山が来函したのである。用瀬霊山の着任の報せを聞き安心したのか、病氣療養中だった宮本頌山は、大正12年郷里の香川県で不帰の人となった。

用瀬霊山は京都福知山の人で、東京医学講習所在学中に一時琴古流を学んだが、大正3年12月から軍医として姫路衛生病院に勤務したとき、牧野直山について都山流を学んだ。大正9年9月に准師範昇格と同時に専門師匠を志し、渡道直前まで舞鶴で教授活動が続いていた。



用瀬霊山

青士会を支えた医者仲間

以上が青士会結成から用瀬霊山着任までの概略であるが、函館青士会の活躍になくてはならなかった二人の医者がある。その一人は竹田侃一郎と同じ函館市立病院外科医の三上理啓である。彼は青森県中津軽の人で、東北帝大医学部卒業と同時に、大正10年に渡函した。郷里が錦風流根柢派の根柢地だったこともあり、幼少の頃から錦風流古典曲を学んでいたが、函館市立病院に着任するや、竹田侃一郎の勧めで青士会に入り、都山流に転門していった。竹田・三上の両名は仕事の上でも同じ病院の内科医と外科医という密接な協力関係にあり、趣味の方でも名実ともに車の両輪として青士会を盛り上げていった。

もう一人の医者は大正12年に私立函館渡辺病院耳鼻咽喉科医として着任した、平野雄三郎である。彼は20歳の頃から尺八を始め、田島昇山に師事して奥伝免許を受けていた。一時、郷里の金沢で尾山座の興行主をしていたこともあり、芸達者で活動的な人だった。

大正11年秋に用瀬霊山が来道し、軌道に乗

せるまでの間、これら三人の医者仲間が、青士会の活動の母体を支え、物心ともに貢献したのである。その業績は宗家はもとより、流本部内でも高く評価され、大正15年6月には最初の師範礼遇に竹田侃一郎が、全国5名の一人に選ばれたのである。

また、昭和5年には三上理啓・平野雄三郎も揃って、その業績により准師範礼遇に推挙され昇進したのである。

このように函館の都山流は、竹田・三上・平野・用瀬という医師を生業とした人達によって支えられ、大きく発展することになった。

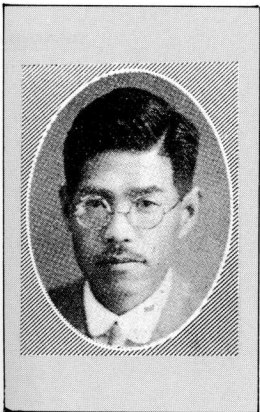
産炭地の尺八

北海道の炭鉱開発に伴い、空知地方を中心とした石炭産業が飛躍的な発展を遂げた。そのため道内はもとより、全国各地から夢と希望を胸に青年達が産炭地に職を求めて集まってきた。その中にはすでに尺八を手にし、才を伸ばそうと努力している人たちもいた。特に北海道炭鉱汽船会社に働くものの中には、都山流を学んだ人が多かった。

大正6年に入社した金森剛山は函館の人で、父の尺八に感化を受け、函館商業在学中から琴古流尺八を勉強していた。入社後、職場の仲間だった長野周悠から都山流のことを知って、その後は都山流に傾斜して稽古を重ねていた。

また、東北帝大医学部を卒業して、大正7年8月に社医として炭鉱汽船会社に入社した大内祐山は、大正3年頃から仙台の細田揚山について都山流を学んでいた。夕張に来たときには、相当吹ける力を身に付けていた。

大正7年4月に入社した日野康秀も尺八に興味を示し、入社後間もなく仲間達に誘われて都山流を学んでいた。



大内祐山

ひとすじの糸に、心をこめて……

三味線

琴・三味線の専門店



小玉楽器店

札幌市中央区南2条西8丁目
☎(011)231-8300・241-2560

こうした北海道炭鉱汽船会社に働く者を中心とした夕張の尺八愛好家達は、確固たる指導者のないまま、同好の士が集まって気ままに練習を重ねてはいたが、決して現状に満足しているわけではなく、常に心の中では有資格者による本格的な指導を渴望していた。

札幌の同好会

北の都である札幌の様子はどうかだったのだろうか。大正7年に北海道帝大水産学部に入學した中野長俊は、以前から神戸で畑中康山について都山流を学んでいた。中伝を取ったばかりだったが、相当吹けたとみえ、入學すると同時に横山彦三郎や島谷柳一らの仲間を集めて吹きまくっていたという。中野長俊の芸熱心は並み大抵のものではなく、学校に近い桑園の下宿で毎晩吹いていた。とは言っても札幌には師匠がいなかったため、来札後も神戸の畑中康山との文通は続いていた。

大正7年2月に神戸から転居し、札幌で歯科医を開業した西風福一は、和氣島庸山らについて都山流を学び、すでに中伝免許を取っていた。彼は札幌歯科医師会長や北海道歯科医師会副会長などの要職につく程の人物で、企画力や統率力にも秀でていた。中伝を取り、吹きまくって仕方のない時期だったが、札幌に転居後は、一緒に吹く仲間がいない。これ程の街に都山流尺八を吹く者が誰もいないわけではないはずだと、北海タイムスに「都山流愛好者集まれ」と広告を出した。この新聞広告を見て一番先に現れたのが、今井呉服店の舎監をしていた大森類治だった。その内、札幌鉦務署の監督だった只野四郎や、古谷製菓の技師長をしていた猪狩源三郎らも加わって、同好会も充実し、益々盛んになった。

更に、北海道帝大水産学部の中野長俊らを中心とする学生達も参加し、札幌の都山流が一堂に会する形となった。

どんなに会が盛んになろうとも、彼らには師と仰ぐべき人がいないことに対する一抹の淋しさがあった。そこで協議の結果、中野長俊が神戸で師事していた畑中康山を会長とし、会の名称は篁会とした。篁会というのは、初代北原篁山一門が組織しているもので、畑中康山が北原篁山の門人として神戸篁会を主宰していたことによる。

こうして札幌の同好会は、中野長俊以外は一度も会ったことのない畑中康山を会長とし、自分たちの師と仰ぐことにしていた。会長に祭り上げられた畑中康山は、さぞかし不思議に思っていたであろう。会長であり師匠となったからには免状を発行しなければならず、今のようにはビデオやカセットのない時代だったので、文通だけで免許状を発行したりもしていたようである。当時の様子を畑中康山は、次のように述懐している。

『当時、学生の中堅筋であった横山・仙波両君に中伝免許を贈った処、両君は其の竹号を始めて付いた免状を懐中にして飛び出し、一晩中至る処の料亭で「おいらはただ者ではないぞ」と免状を振り廻したという事も聞いております。当時は皆鼻息の荒い大家揃いで、めくら減法の気楽な連中、札幌の絃方も相当手を焼かれた事と考えます』（北海道における都山流尺八楽義展誌「都山流康琳会の起源と思い出」）

大正8年2月に小林館（札幌劇場の前身）で篁会の初めての演奏会が開かれた。雪の降る寒い夜だったにもかかわらず、7、8百人収容のところに千人近く入った程の盛況振りであった。プログラムにも工夫を凝らし、都山流の特色を出そうと、尺八による大合奏曲の本曲「若葉」を出して人気を集めた。

中尾都山が渡道を決める

演奏会の成功は益々会員の盛り上がり火を付け、会主を北海道に呼ぼうとする動きに変わっていった。会員協議の結果、演奏会を企画し、先生を特別出演ということで招聘することになった。

大正8年秋も深まった頃、中野長俊は神戸の畑中康山宛に手紙を書いた。その内容は「来春、学生の主だったものが12名卒業するので、その記念に演奏会を企画したいので、是非絃方を連れて渡道してほしい。できれば宗家も北海道見物がてら来て頂ければ幸いです」というものだった。

手紙を落した畑中康山はアメリカから帰国して間もなくであり、景気も悪く悪性の風邪が流行していたので、寒い北海道へ行く気にもなれず数日を過ごしていた。4月5日

たつたある日、毎月定期的に開催されていた特別講習会に参加した畑中康山は、中尾都山に札幌での演奏会の企画を話すとともに、冬の北海道は気が進まない旨伝えたのである。ところが、この話を聞いた中尾都山は「行きましよう。北海道の見物は冬に行かねば本当の北海道を知ること出来ないと即座に答えて、北海道演奏旅行への決意を示したのであった。これを聞いて断れなくなった畑中康山は、宗家随行となればそれ相当の準備も必要であろうと、早速渡道承諾の旨打電し、その後は毎日のように電報で打ち合わせた結果、演奏会は大正9年1月25日と決定した。

畑中康山の来札

問題は会員のレベルであった。中野長俊の他は一面識もなく、その技量もわからない。それなりの準備はしていると思われたが、会主として責任を感じたのであろう、畑中康山は一足先に、1月8日の夜汽車で神戸を出発した。数日後に迫った演奏会を前に、東京以北を初めて旅する畑中康山の心境はいかばかりであつたろうか。長い旅の末札幌に着いたのは10日の夜遅くだった。駅には中野長俊ら篁会の人達が多数会主の出迎えに集まっていた。

翌日から西風福一宅の一階の一室を借りて、演奏会のための稽古が始まった。待ちに待った先生の来道だけに、会員達も真剣だった。当時、炭鉱汽船会社の会計係をしていた金森剛山は、畑中康山が来札して毎日講習をしているとの新聞記事を見て、鉦長に掛け合って一ヶ月の休みをもらい、受講に通ったというから、今ではとても考えられない時代だったといえよう。

中尾都山出演による演奏会

1月23日に、中尾都山が絃方の飯田君子を連れて、演奏会出演の為来札した。そして、1月25日に錦座（松竹座の前身）で、中尾都山特別出演による札幌篁会主催の大演奏会が開催された。これが北海道における都山流最初の演奏会である。

この時、中尾都山は自作の「夜の懷」を独奏した。

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎代221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

伝統芸能「北海道」のあゆみ

専門師匠の活躍による

都山流の全道拡大

中島聖山

前号では、都山流を取り上げ、各地における同好会の誕生から専門師匠の来道までを概括的に述べたが、今回は北辺の地での専門師匠達の活躍と、都山流の全道拡大の様子について触れてみることにする。

畑中康山による康琳会の結成

北海道帝国大学入学前に、神戸で畑中康山に師事していた中野長俊の仲介により、札幌に篁会（こうかい）が誕生し、更にはその会主である畑中康山が、第2回篁会の演奏会に出演するため、大正9年1月10日の夜遅くに札幌入りしたことは前号で述べたとおりである。

大正9年1月20日付けの北海タイムス（北海道新聞社の前身）は、札幌篁会結成に至る経緯や畑中康山の来札、25日に予定されている演奏会の模様等について報じているが、それによると札幌篁会の活動は、北大の学生だった中野長俊や島谷柳一等が中心になって、大正6年4月頃より始められており、大正9年3月に両名が卒業することをもって、送別演奏会を企画し中尾都山・畑中康山・糸方等を阪神方面より招聘したことが判る。

連日の大雪で全動的な交通マヒ、電信回路の故障の中、1月25日午後5時より錦座（松竹座の前身）で行われた演奏会は、富貴堂音楽部や今井呉服店等の後援を得て開催された。また、地元糸方として横山富貴社中、新田佐美治社中、水口城華社中、池田清江社中などの賛助出演があり、大規模な演奏会となった。演奏会には出演者全員による国歌「君が代」の演奏に始まり、中尾都山の「夜の懐」の独奏に終わる全20曲のプログラムで行われた。

前半は地元篁会の会員による演奏を中心とし、後半は中尾都山と畑中康山とが交替で演奏した。卒演の記念として中野・島谷の両人は、中尾都山・畑中康山連名の本曲「朝風」の演奏に続いて古曲「小町」を演奏している。

〈尺八演奏大会プログラム〉

主催・札幌篁会
大正9年1月25日於錦座
1、国歌（総員） 2、新玉の曲（駒沢・野崎・只野康春） 3、摘草（富沢・田沢・仙波康彦） 4、銀世界（山口・永井・横山康暁） 5、春の曲（寺田・新堂・大谷・鈴木） 6、本曲若葉（二部・大谷・富沢・金沢・金津・大森・窓梅康暁・西風風鳴・中野雪翔、一部・新堂・寺田・桑原康波・仙波康彦・猪狩康晴・島谷康彦） 7、夜々の星（畑中康山） 8、秘曲若清水（中尾都山） 9、時鳥の曲（富沢・金沢・桑原） 10、楫枕（大森・西風・猪狩） 11、若葉（中尾都山） 12、霜夜（畑中康山） 13、寒月（畑中康山） 14、磯の春（仙波・横山・只野） 15、朝風（中尾都山、畑中康山） 16、小町（中野・島谷） 17、懐月調（畑中康山） 18、残月（中尾都山） 19、笹の露（畑中康山） 20、夜の懐（中尾都山）

当日の楽屋における中尾都山の様子を、篁会の世話役的存在だった西風福一は「思い出の記」の中で次のように述べている。

「……愈々今日の呼び物、宗家自慢の『夜の懐』を期待して、時の移るのがもどかしく待つ間、程なく準備室を覗いてみれば、一升

尺八篇 その3

瓶2本鎮座する横で、宗家はコップ2〜3杯あおっている。「先生大丈夫ですか」と聞くと、「自作自演の曲やし、やっぱ油が切れると指が動きまへんな。舞台でボーッとほろ酔いが出てきた時が絶頂です。目をつぶってな」と言われた。……（中略）……愈々曲が終わった頃、満場シーンとして拍手もなく、水を打ったような静けさが何十秒か過ぎて、一瞬間いいあわせたように拍手鳴り止まず、いい気分を味わいました」（北海道における都山流尺八楽義展誌「思い出の記」）

流祖中尾都山の演奏は、恐らく札幌の邦楽ファンが初めて聴いた、プロ尺八演奏家による演奏であつたらう。

このように宗家・畑中康山を招聘しての大演奏会は、大成功に終わった。翌日、宗家・畑中・飯田の三師は、揃って大阪へ帰る予定でいた。しかし、今井呉服店から店員慰労のための演奏依頼があつたため、出発を2日遅らせることにし、27日には今井呉服店の3階で、同じプログラムによる演奏会を開催した。

その夜、今井呉服店の近藤支配人の案内で三人は料亭いくよで歓迎を受けた。酒を飲み交わし、宴もたけなわの頃、近藤支配人から「畑中さんのような方が、札幌に欲しいものです。ひとつ北海道の仕事をせられましてはいかがです」と相談を持ちかけられた。これを聞いた宗家が、「畑中君、一つやってみてはいかがです。北海道の仕事は腕次第で大きな事になりますでエー」と畑中康山を促したことに、いとも簡単に畑中康山師の札幌派遣が決定したといわれている。

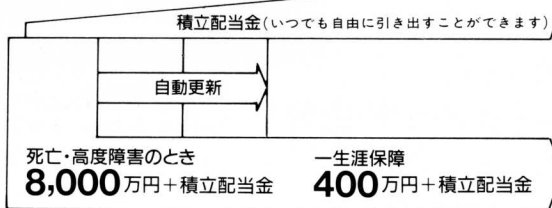
このようなことから、翌28日には宗家と飯田君子の両師は大阪へと帰途に着いたが、畑中康山は、一人札幌に残らなければならなかった。いくら新開地での夢に胸をふくらませていたとはいえ、酔いもさめて冷静さを取り戻していた畑中康山にとって、札幌駅で大阪へ帰っていく両師を見送ったときの心境はどんなであつたらうか。

札幌に残った畑中康山は、約一か月間旅館

いつだって、家族。

一生保障コース

リード21
8000
10年更新型
20倍プラン



生活設計の

第一生命

札幌支社

電話(011)241-3141

住まいを続けたが、その内、南1条西8丁目の三吉神社の裏通りに、小さな一戸建てを借り「尺八指南」の看板を掲げるとともに、康琳会を結成したのである。

畑中康山の略歴

畑中康山は本名を儀七といい、播州北条町の有名な物産問屋に生まれた。音楽好きだったとみえ、14歳の頃から尺八を手にし、大阪市南久太郎町東雲学校在学中には、同校の助手をしていた松井先生に師事して宗悦流を学んだ。時に17歳である。

将来は音楽家を夢見ていたが、21歳のとき父が他界したため家督を相続し、家業を継ぐこととなった。しかし、事業に失敗して大正2年には姫路市に移転し、親戚の経営する銀行に勤めることになった。偶然にもその銀行の重役が尺八愛好家だったことから、重役の紹介で都山流師匠の森田直芳に入門した。



畑中康山

森田師からは中伝免許状までもらったが、大正5年には都合により神戸へ移転したため、出張稽古に来ていた初代北原筆山に転門し、奥伝・皆伝と進み大正8年2月の准師範試験に登第して康山と号したのである。

神戸時代に教えた学生が、北海道帝大に入学したことが契機となり、大正9年1月に渡道し、そのまま移住して北海道は勿論、樺太までの広大な土地を縦横に歩き回り、都山流の普及に努めたことから、初伝免許状を授与した数は六百を越えるに至った。

畑中康山が北門の重鎮として、流の内外を問わず高く評価されるのはこうした業績によるものである。

函館の都山流

大正11年9月に宮川頌山の後を継ぐため、宗家の命を受けて舞鶴より来函した用瀬靈山は、早速相生町の二戸建てを借り指南を開始

した。用瀬靈山の印象について、根本波山は「追憶」と題して「楽韻」（昭33・11）の中で次のように語っている。『……先生は物欲のない清廉な人であった。胃腸の弱い人で御馳走も喜ばなかったし、酒にも弱かった。温厚で幽静な人だった。……』

用瀬靈山が指南を開始した当時の月謝は、初伝が3円で、中伝・奥伝・皆伝と進むにつれて1円ずつ高くなっていった。だから30人の弟子がいれば、年若い校長の給料とほぼ同額の収入を得ることが出来た。

用瀬靈山は来函と同時に教授を開始し、門人の拡大を図るとともに竹霊会を結成して、門人と一体となって音楽活動を展開し始めた。

大正12年3月3日の節句には、函館市公会堂で竹田都鈴・松岡暁光・上原頌有等とともに竹霊会の演奏会を開催している。



函館市公会堂

函館の都山流は医者を中心とする同好会によって支えられ発展してきたが、大正10年春に函館市住吉小学校の訓導をしていた根本元貞（波山）が入門してからは、次第に教師の世界にも都山流尺八が普及し出した。

大正13年頃、函館師範学校の校医をしていた渡辺鉄太郎（霊瑤）は、亀田方面に10人位の門人を集め、仕事ながら懇意にしていた根本波山に指導を依頼した。しかし、根本波山は

多忙を理由に断り、後輩の西村霊谷にこの仕事を譲った。

西村霊谷は専売公社に勤めていたが、夕張在任のとき、畑中康山の門人となり、中伝免許状まで取得していたが、函館転勤と同時に用瀬靈山に転門した人である。まだ指南の資格を持たない西村霊谷に仕事を譲るに当たって、根本波山は用瀬靈山に師匠昇格の対応を願ひ出たという。竹霊会の中では、技量・人格ともに秀でていた根本波山は、代稽古を一年間勤めたほどであり、師の信頼も得ていたので計画どおり、西村霊谷は師匠に昇格し、亀田方面の門人育成に当たることとなった。

竹霊会の充実とともに、演奏会も毎年行われるようになった。大正14年6月20日には東京から山城曙山を呼び、公会堂で演奏会を開催しているし、翌大正15年11月13日には、札幌から遠藤検校を招聘し、歓迎の演奏会を開催した。

昭和4年7月の流祖中尾都山来函の打合せも兼ね、用瀬靈山は昭和4年5月26日の都山流大演奏会視察のため上京した。

室蘭の都山流

村垣容山が大正8年6月に大阪から帰り、日本製鋼所室蘭工場に復職して教授を開始した。芸道のため休職してまで大阪へのぼるなど努力して指南免許状を取得したがいあって、門人の数は次第に増え、大正12年までには60名を越える程にまでなった。

村垣容山は当時室蘭で盛だった琴古流に負けじと、彌生会を結成して地元の方の協力を得て、合奏研究会や演奏会に積極的に取り組んだ。専門師匠ではなかったが、当時、門人の数では函館の用瀬靈山や札幌の畑中康山を、遙かに上回っていた。こうした流勢拡大の業績により、村垣容山は、大正13年に准師範に昇格し、名実共に北海道の中核としての地位を獲得した。

彼は門人育成に力を注ぐだけでなく、邦楽普及のため演奏会も積極的に開催した。大正14年5月27日に製鉄所倶楽部で、会員等と彌生会の演奏会を開催したり、翌15年1月には名流大会視察のため上京、同年5月2日には門人横塚容陸開軒披露の演奏会を、母恋の

事業内容

- 建築一式工事、とび・土木・コンクリート工事、タイル・れんが・ブロック工事、ガラス工事・内装仕上工事、建具工事等の請負・設計・施工監理
- 建築・土木資材の販売
- 建築・土木資材及器具建具等の輸入・輸出
- 建築・土木資材並びに機材のリース業
- 砂利・砂・碎石の採取販売

SITY

■ 建築土木資材の総合商社

シティ・キョードー株式会社

〒062 札幌市豊平区豊平3条8丁目1番26号協同ビル
TEL(011)811-6777(代) FAX(011)824-5396

共楽座で開催した。また、大正15年8月1日には、札幌から遠藤検校を呼んで、錦座で演奏会を開催したりした。しかし、その後は不況のあおりを受け、門人の数も次第に減少していった。尺八の普及発展には、有名な糸方の協力が必要だと考えた村垣容山は、昭和3年に台湾から生田流大検校の川井良都を招聘し、同年11月17日に輪西工場の職員倶楽部で、翌11月18日には御前水の製鉄倶楽部で検校の歓迎演奏会を開催した。しかし、努力のいかにもむなしく、邦楽界の建て直しはならず、わずか1年で検校は台湾へ帰国することとなったが、帰国するにも旅費がなく、検校としては命の次に大切な筆や三絃を売却して旅費としたというから、いかに邦楽が低迷し衰微していたかがわかる。一時は60名を越える門人を抱えていた彌生会も、昭和6年頃にはわずか10数名にまで減ってしまった。しかし、昭和7年9月の東京准師範試験で黒光 山が登第、翌8年7月の札幌准師範試験では飯田義山が登第するなど、村垣容山の後を継ぐべき室蘭の核となる陣容が整い、次第にその勢力を巻き返すこととなったのである。

小樽の都山流

大正15年3月に指南免許状を取得した畑中康山門人の、中桐康薫と中桐康遙の兄弟が教授を開始したのがその始まりとされている。教授開始当時入門した人としては、専売公社の浅地康楠等がいる。しかし、中桐兄弟のことに関しては、昭和7年発行の都山流史に、大正15年3月5日付けで指南免許状を交付した旨記載されているのみで、詳しいことはわからない。

その後、昭和3年春からは、早稲田大学在学中に倉川簫山に師事し、東都会の達人として知られていた高根致山が帰郷し、生田流筆曲の師範だった文子夫人とともに、教授を開始した。

都山流の地盤も出来上がった昭和3年秋には、高根致山の努力もあり、都山流による初めての演奏会が開催された。

大正9年1月、畑中康山の札幌転居とともに入門した金森剛山は、夕張の北海道炭鉱汽船会社を退職し、昭和6年から小樽の犬上商

船に入社して、康琳会小樽支部を結成するとともに、支部長として教授や組織拡充に努力した。更に金森剛山は門人を集め剛風社を結成して、筆・三絃との合奏にも力を注いだ。

旭川の都山流

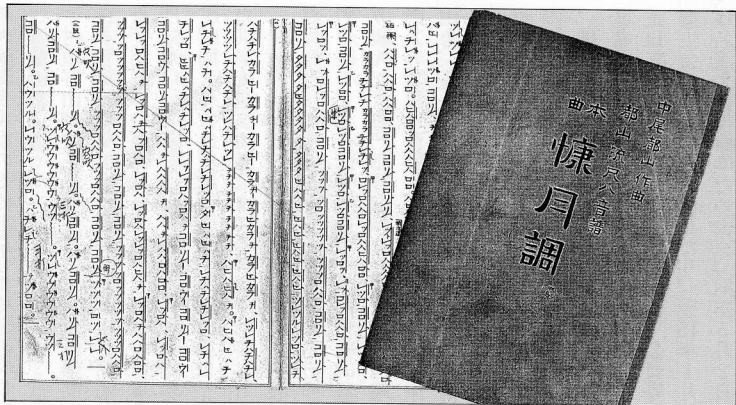
旭川の草分けは、大正9年8月に畑中康山に入門した伊藤彩山であろう。伊藤彩山は農場を経営するかたわら、会社を経営したり金融業をしたりする等、事業化としての手腕を発揮していたが、尺八界でも力量を十分に発揮し、大いに活躍した。入門の翌大正10年2月に指南免許状を取り、大正13年には准師範に昇格していることから、そうした活躍の様子と、畑中康山の信頼が、いかに厚かったかを窺い知ることができる。

伊藤彩山と同じ大正9年8月に、畑中康山の門人となった唯是想山は、恵まれた体格と音楽的才能により、北海道の都山流を背負って立つやに見えたが、楽譜を印刷して門人に販売したことから、畑中康山との間に亀裂が生じ、約7年間破門同然の扱いとなった。

唯是想山は近文に住み、旭川第7師団司令部の土木技師をしていた。仕事のかたわら門人だった星野想波が経営していた明治屋支店の2階を借り、稽古場として「康門想琳会」の看板を掲げ、週2回教えていた。昭和2年当時、門人の数は20名を越え、旭川ではもっとも勢力のある社中だった。その当時、旭川には師範の伊藤彩山を始め、指南の唯是想山・皆川彩峰・根本霊波・富沢康碧等がいた。

昭和3年6月15日、唯是想はその業績により准師範に昇格し、想山を名乗った。同年11月18日には、札幌から師匠の畑中康山を呼び、地元先輩の伊藤彩山の賛助出演を得て、旭川市実科高女講堂で想門康琳会の演奏会を開催した。

唯是想山は体格が良く、物干し竿ほどの太い尺八を吹いていたらしく、彼が和室で尺八を吹くと、障子がブルブル鳴ったといわれている。音楽理論にも通じ、三絃やバイオリンも演奏できた。特に三絃は相当な腕前で、「まの川」程度の曲であれば、自分が三絃を弾いて門人達に合奏練習させることができた。



唯是想山の石版刷り楽譜

当時、都山流の本曲は秘曲といわれ、先生の演奏を聞いて、門人が写譜する形式で教授されていた。しかし、この方法では能率が悪く、週2回の稽古では思うように進まなかったため、唯是想山は門人の写譜を省力化し、稽古の効率化を図ろうと、本曲を石版刷りし、門人に与えたのである。これが師匠の畑中康山に知れたことにより、破門同然となり、以降都山流人としての活躍の道を閉ざされる結果となった。仕方なく唯是想山は新興邦楽会を組織して独立し、その後も尺八を吹き続けた。

昭和10年2月18日に、札幌の今井記念館で新興邦楽会の演奏会を開催した。その時、唯是想山は長男震一(当時11歳)に筆を弾かせ、宮城道雄作曲の「春の海」を演奏した。長男震一とは、数々の名曲を作曲し、世界的に有名な生田流正派の唯是想一である。その後、昭和10年秋、唯是想山の都山流復帰が実現している。

次号へ

おこと・三味線——邦楽専門

傑屋楽器店

〒001 札幌市北区新川3条14丁目3-12

☎(011)761-9057

●札専カード・ローンをご利用ください。

都山流の定着と

流祖中尾都山の相次ぐ来道

中島 聖山

前号では、函館の宮川頌山や用瀬霊山、札幌の畑中康山ら宗家派遣の専門師匠の活躍、並びに日本製鋼所に勤務しながら、専門師匠に劣らぬ活躍をしていた室蘭の村垣容山らの業績により、都山流が大都市を中心に全道拡大した様子を述べた。今回は都山流の全国的な発展の中にあつて、新開地である北海道がいかに注目されていたかを、相次ぐ中尾都山の来道を中心に述べてみることにする。

流本部が畑中康山を評価

大正10年2月、都山流は創始25周年を迎えた。中尾都山が明治29年2月15日に、大阪市天満此花町の宮川理髪店の2階を借り、尺八指南を始めてから25年目の春である。創始当時、尺八の一流派が、海を越え山を越えて、全国的に普及発展すると、誰が予想しただろうか。流の創始者である中尾都山ですら、思っても見なかったことではなかった。

大正10年3月13日午前9時から、大阪市の中央公会堂で、都山流創始25周年を祝う記念演奏会が開催された。会には中尾都山が全国で活躍する専門師匠の中から選抜した、流を代表するにふさわしい40名の演奏家達が出演した。渡道して一年余りの畑中康山もその一人に選ばれ、出演のためはるばる札幌から大阪へ出掛けた。そして、山口の高山麗山や多度津の浜田南山らと「松竹梅」を演奏した。プログラムは本曲「春霞」に始まり、中尾都山の「岩清水」独奏で終わる20曲で構成される、流創始25周年を祝うにふさわしい盛大なものだった。

大正9年1月に渡道して以来、流発展のた

めに献身的な努力を続ける畑中康山の評価は、北海道の流勢拡大とともに次第に高まつて行った。宗家の信頼厚かった畑中康山は、大正11年2月15日来道2年目にして見事師範に昇格した。同年11月12日には大平館で、康琳会の会員達主催により畑中康山の師範昇格を祝う記念演奏会が開催された。

大正6年に流運営の民主化のために制定され、宗家重鎮として選ばれた10名で発足した評議員会は、大正9年には地域の代表者で構成する形となり、全国5区7名が2期評議員に選ばれた。更に大正12年3月には3期の評議員として、全国15区の中から20名が選出された。この時、畑中康山は北海道から始めて評議員として選ばれ、流の運営に参画することとなった。

こうした畑中康山の業績により、大正12年7月1日、宗家は20円の奨励金を畑中康山に授与したのである。

函館で特別演奏会開催

特別演奏会は、流勢の拡大を目的に大正8年から始められた、本部主催の演奏会である。函館・室蘭・札幌の3都市を中心に、北海道の都山流が定着しつつあった大正12年に、第8回目の特別演奏会が函館で開催された。流祖中尾都山を始め、全国有数の尺八家の演奏が聴けるとあって、竹田侃一郎が地元の流人は万全の体制で受け入れ準備を行った。

7月7日午後7時から錦輝館で開催された特別演奏会は、地元函館の流人20名による本曲「朝緑」の演奏に始まり、中尾都山の「岩清水」の独奏で終わる全10曲のプログラムで

行われた。

この会には、函館の用瀬霊山を始め、室蘭の村垣容山、札幌の畑中康山ら、北海道を代表する師匠のほかに、仙台の細田揚山、東京の津田維山・矢坂鈴山、大阪の平松應山らが出演した。糸方は地元函館の川内佐登治や札幌の遠藤操琴、東京の中島利之（後の生田流正派家元である中島雅楽之都）、大阪の鈴木君子らが出演した。

◎都山流第八回特別演奏会番組会場 北海道函館市錦輝館

日時 大正十二年七月七日午後七時開会

一、本曲 朝緑（一部・函館・用瀬霊山、松岡曉光、西村康谷、松本頌青、渡辺頌瑤、小佐野紫朗、久保金蔵、福田喜三、高屋敷卯之松、三上理啓、二部・函館・竹田都鈴、藤田頌峰、上原頌有、村上頌映、中田頌豊、渡辺精一、根元元貞、鈴木綱太郎、高橋哲、中村義雄）二、春の曲（函館・上原、松本、村上、渡辺頌、中田、箏・大阪・鈴木君子、札幌・遠藤操琴、東京・中島利之）三、榻枕（室蘭・村垣健容、函館・竹田、大阪・平松應山、箏・函館・河内佐登治、三絃・札幌・遠藤）四、本曲 湖上の月（一部・中尾都山、畑中康山、用瀬、津田維山、二部・細田揚山、平松、矢坂鈴山、村垣）五、御山獅子（東京・津田、矢坂、箏・東京・中島、三絃・大阪・鈴木君）六、本曲 朝霧（一部・中尾、用瀬、竹田、二部・細田、津田、松岡、三部・平松、村垣、藤田、四部・畑中、矢坂、西村）七、千鳥の曲（東京・中尾、仙台・細田、箏・大阪・鈴木君、東京・中島、八、都の春（函館・用瀬、東京・津田、箏・函館・杉村萩園、畑野松勢、三絃・小林幸勢）九、若菜（札幌・畑中、大阪・平松、箏・札幌・遠藤、三絃・東京・中島）十、岩清水（中尾）

中尾都山一行は、この後、小樽・室蘭・夕張・札幌・旭川の5ヶ所で地元主催の演奏会に出演した。また、中尾都山と中島利之の二人は、北海道巡演のあと樺太へ渡り、大泊・豊原などでも演奏を行い、7月下旬帰路に着



札幌・日専連・北専・札幌版・HCB
オリエント・セントラル・ミリオン
をご利用下さい。

邦楽邦舞の店

株式会社 **キリヤ楽器店**

札幌店 札幌市豊平区平岸3条15丁目2-20

TEL 011-823-6164

旭川店 旭川市3条通7丁目右10号

TEL 0166-22-2302



■営業時間＝午前10時～午後6時30分
■定休日＝水曜日

いた。
中尾都山一行の全道巡演

年月日	会場	司会	主な出演者
大正12年 7月9日	小樽倶楽部	島谷康馨	中尾都山・中島利之・梶野縫子・遠藤操琴 島谷康馨
大正12年 7月11日	室蘭劇場	村垣容山	中尾都山・中島利之・梶野縫子 鈴木健山・村垣容山
大正12年 7月13日	夕張鹿谷 社員集会場	金森康陵	中尾都山・中島利之・梶野縫子・鈴木君子 中尾都山・金森康陵
大正12年 7月15日	札幌大平館	畑中康山	中尾都山・中島利之・梶野縫子・遠藤操琴 畑中康山
大正12年 7月17日	旭川市村館	伊藤康彰	中尾都山・中島利之・梶野縫子 畑中康山・伊藤康彰

中尾都山の来道は、大正9年1月の札幌會出演以来、2回目であるが、このわずか3年の間に、北海道各地に都山流が定着し、演奏会を開催できるまでに成長した姿を目の当たりにして、さぞかし驚いたことであろう。

室蘭の村垣容山は、流祖中尾都山来道の特別演奏会を企画するに当たり、大阪から鈴木健山を呼び出演させることで、恩師に対する感謝の一端を表そうとした。こうした中にも村垣容山の人間性を垣間見ることができた。

第8回特別演奏会の開催に当たり、開催地代表として活躍した業績により、大正13年10月5日、用瀬山は師範に昇格した。

都山流創始30周年記念

大正15年2月14日午前11時より、東京帝國劇場で都山流創始30周年を祝う記念演奏会が開催された。出演者は倉川簫山ら東京の幹部達であった。翌2月15日には、功労者の表彰と記念品の授与が行われた。函館の竹田侃一郎はこの時、宮城道雄や菊原琴治らとともに表彰され、記念品として銀製洋盃一組を授与された。

北海道各地でも流創始30周年を祝う記念の演奏会が行われた。3月20日には旭川商業会議所にて、伊藤彰山司会により行われ、札幌の畑中康山も出演した。8月1日には室蘭の錦座で、村垣容山司会により行われ、糸方として札幌の遠藤操琴が出演した。また、10月3日には樺太大泊の中央座で松村康桜らが世話人となり演奏会を行い、札幌の畑中康山や

糸方として、旭川の三浦栄州らが特別出演した。更には11月6日、夕張の登座で夕張康琳会が主催して演奏会が行われ、畑中康山が出演した。

第18回特別演奏会と著しい師範の増加

昭和3年6月20日、中尾都山は中島利之らと同行して、3度目の北海道巡演のため東京を出発した。というのは、6月23日に札幌で第18回の特別演奏会を企画していたからである。札幌入りした一行は、演奏会に先立ち6月22日にNHK札幌放送局でラジオ放送の録音を行った。

6月23日、札幌市公会堂で中尾都山司会による都山流第18回特別演奏会が開催された。

演奏会には旭川の伊藤彰山・唯是想山、小樽の金森康山、札幌の久保磐山ら准師範を中心に総勢40名の畑中康山門下生による本曲「若葉」の演奏により始まった。

◎都山流第十八回特別演奏会番組会場 札幌市公会堂

日時 昭和三年六月二十三日

一、中尾都山作曲・本曲 若葉（一部・彩山、康蕉、康星、康駿、康邦、磐山、康鳳、想風、康、蕉雨、康洞、康江、康煌、康坡、康晃、康堂、康鳴、康濤、稜紫、康勇、二部・想山、康涯、康鳳、康楠、康橋、虚山、康林、康、蕉芳、蕉夢、康尚、康節、康聲、康照、康保、康秀、康瑞、康桐、康隆、康石）二、吉沢検校作曲・千鳥の曲（松浦康弘、宮川康經、加藤康彰、中村康慶、伊達康宗、中村康順、

吉木蕉博、高康朋、箏・中徳検校、同社中）三、菊岡検校作曲・茶の湯音頭（加藤康照、笹岡康隆、古川康橋、下野蕉夢、鈴木康晃、松野康勇、安達康保、須田康石、三絃・中徳、箏・同社中）四、山登松齡作曲・四季の遊（田藏康桐、真柳康菁、稗貫康星、河村蕉雨、箏・橋本賀寿井、竹中栄子、前川春子、浅田弥生）五、菊岡検校作曲・けしの花（平野康嶺、春田康汀、五十嵐康亭、佐藤康月、三絃・中島利之、梶野縫子）六、町田嘉章作曲・春信幻想曲（一部・中尾都山、伊藤彰山、久保磐山、二部・畑中康山、唯是想山、金森康山、三絃・梶野、中島）七、菊岡検校作曲・楫枕（金子康蕉、菅野康鳳、目良康江、広瀬康節、東野想風、三絃・中徳鳳琴、西田つる子、箏・梶野）八、山勢松韻作曲・都の春（蘇武康涯、田村康鳳、井森康壽、井出蕉芳、本郷康坡、荒木庸煌、箏・橋本、本田喜代子、竹中、諸住栄子、浅田九、宮城道雄作曲・軒の雫（唯是、金森、三絃・梶野、箏・中島）十、松浦検校作曲・若葉（伊藤、久保、南都康秀、三絃・中島、中徳鳳、箏・梶野）十一、中尾都山作曲・本曲 朝霧（一部・康嶺、康遼、康幽、康帆、康經、二部・康江、康韻、康柳、康文、康彰、三部・康亭、康彩、康弘、康宗、康朋、四部・康月、康擴、康慶、蕉博、康順）十二、宮城道雄作曲・比良（中尾、畑中、三絃・中島、箏・梶野）十三、山田検校作曲・松上の鶴（牧野康遼、石田康韻、山田康彩、板倉康文、加藤康擴、高井康幽、高橋康柳、景浦康帆、箏・橋本、本田、前川、浅田、諸住）十四、中尾都山作曲・本曲 夕月（一部・中尾、二部・畑中、伴奏・中島、梶野）十五、菊岡検校作曲・まの川（准師範札遇・西風康洞、大内康尚、大森康堂、岡本康林、三絃・梶野、箏・中島）十六、宮城道雄作曲（甲）春の訪れ（乙）秋の調（中尾、箏・中島）

糸方は地元札幌から中徳検校社中と橋本賀寿井社中が出演し、「千鳥の曲」や「茶の湯音頭」などを演奏したほか、東京から中尾都山に同行してきた中島利之や梶野縫子が名演奏を披露した。この時、中尾都山はプログラムの最後に中島利之と宮城道雄作曲の「春の訪れ」と「秋の調」を演奏し、新曲の都山流

事業内容

- 建築一式工事、とび・土木・コンクリート工事、タイル・れんが・ブロック工事、ガラス工事・内装仕上工事、建具工事等の請負・設計・施工監理
- 建築・土木資材の販売
- 建築・土木資材及器具建具等の輸入・輸出
- 建築・土木資材並びに機材のリース業
- 砂利・砂・碎石の採取販売

SITY

■ 建築土木資材の総合商社

シティ・キョードー株式会社

〒062 札幌市豊平区豊平3条8丁目1番26号協同ビル
TEL (011) 811-6777(代) FAX (011) 824-5396

をアピールした。その後、中尾都山ら一行は、会を行い、仙台に立ち寄ったあと、7月16日小樽、旭川、樺太など7か所で演奏会や講習に帰京した。

地で演奏活動することによって、都山流の勢力は飛躍的に発展することになったのである。

第18回特別演奏会後の宗家一行の日程

年月日	内容	場所	司会
3年6月24日	演奏会	小樽市小樽倶楽部	金森剛山
3年6月26日	〃	旭川市商業会議所	畑中康山
3年6月29日	講習会	樺太大泊王子製紙倶楽部	
3年6月30日	演奏会	〃豊原樺太劇場	畑中康山
3年7月1日	〃	〃大泊劇場	
3年7月4日	〃	〃野田町野田劇場	
3年7月8日	講習会	〃函館市	康琳会

中尾都山の来道状況

回数	来道年月	来道理由
1	大正9年1月	札幌會主催の演奏会出演のため
2	大正12年7月	第8回特別演奏会出演及び全道各地巡演のため
3	昭和3年6月	第18回特別演奏会出演及び全道各地巡演のため
4	昭和4年7月	函館竹霊会主催の演奏会出演のため
5	昭和5年9月	函館及び札幌での講習会のため
6	昭和6年8月	35周年記念祝賀会出席及び特別演奏会出演

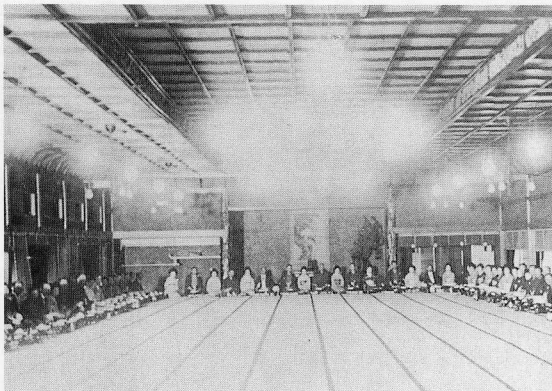


第18回特別演奏会 (S3.6.23)

第18回特別演奏会と北海道・樺太巡演に対する功績により、昭和3年10月5日、畑中康山は北海道の流人としては初めて、竹琳軒冠称を許されたのである。

大正9年には道内に指南の資格を持った師匠は、函館の用瀬霊山、室蘭の村垣谷山、そして札幌の畑中康山の3名しかいなかった。それが都山流30周年の大正15年には17名となり、翌昭和2年には27名、昭和3年には32名にまで増えている。特に伸びが大きいのは札幌・旭川であった。これら指南の資格を持った師匠達が、積極的に門人育成に当たり、各都市別師匠分布状況(単位・人)

都市名	大15年	昭2年	昭3年
函館	1	2	3
室蘭	1	2	2
札幌	4	6	7
旭川	5	4	7
夕張	2	3	2
上川	2	2	2
増毛	1	1	1
歌志内	1	3	3
小樽	1	2	3
釧路	17	27	32
計	17	27	32



都山流35周年祝賀会 (S6.8.9) 札幌幾代にて

中尾都山の来道続く

昭和4年7月6日に用瀬霊山が主宰する竹霊会の演奏会が、函館の錦輝館で開催された。この会には東京から中尾都山を始め、矢坂鈴山・山城曙山ら都山流の達人のほか、糸方



特別演奏会の記念撮影

ハートをそのまますばやく届ける



人生の記念の日に、心をこめてレタックス。

レタックス は、ファクシミリを利用した新しい郵便サービスです。



みなさまの郵便局



として宮城道雄や中島雅楽之都・牧瀬喜代子らが特別出演した。

これは、7月8日に秋田市記念会館で伶風会主催の新日本音楽演奏会に出演する目的があったからで、その途中に函館に立ち寄ったためであった。さらに新日本音楽を普及させるとあって、一行の中には田辺尚雄や町田嘉章も加わっていた。

全国での都山流の普及を目の当たりにした中尾都山は、各地での講習にも力を注ぎ出した。昭和5年秋に中尾都山は、9月14日の東京神田教育会館の講習を皮切りに、全国各地を回る講習の旅に出た。9月19日の新潟のあと、9月22日には函館の用瀬霊山宅にて講習会を開いた。続く9月24日と25日の2日間にわたって、札幌市公会堂で道央、道北の流人を対象に講習会が行われた。宗家はその後仙台で最後の講習を行い、半月に及ぶ講習の旅を終え帰京した。

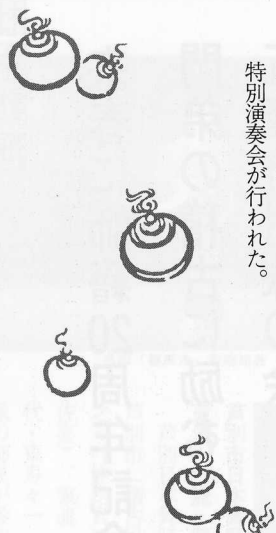
度重なる流の行事を、どれも見事に成し遂げた功績により、函館の用瀬霊山は昭和6年2月15日、宗家から銀杯を受けた。

全国各地での流創始35周年記念祝賀会

昭和6年2月17日の大阪中之島中央公会堂を始めとし、12月5日の兵庫県豊岡町松和亭まで、全国20か所で都山流創始35周年の記念祝賀会が開催された。

北海道でも8月7日に函館の五島軒ホテルで、8月9日には札幌の料亭「いくよ」で、中尾都山出席のもと盛大に記念祝賀会が開催された。

札幌では祝賀会に先立ち、8月9日午前9時から札幌市公会堂で特別講習会が行われ、畑中康山門人ら20名が受講した。引き続き午後からは同公会堂で中尾都山の出演を得て、特別演奏会が行われた。



みんなで創り育てよう 北国の生活文化

こぐま文化基金

こぐま文化基金の果実(預金利息)は

▶ 助成事業

(1)備品整備 (2)国内研修 (3)交流発表の事業に対する助成

▶ 情報提供事業

情報誌「わがまち生活文化」の発行
などの事業に使われています。



募金 みなさまの心からの募金をお待ちしております。

お問い合わせ・お申し込みは

財団法人 **北海道生活文化振興基金**

〒005 札幌市南区真駒内公園1番2号 ☎(011)582-1501

いつだって、家族。

一生保障コース

リード21
8000
10年更新型
20倍プラン



積立配当金(いつでも自由に引き出すことができます)

自動更新

死亡・高度障害のとき
8,000万円+積立配当金

一生保障
400万円+積立配当金

生活設計の

第一生命

札幌支社

電話(011)241-3141

世界を驚かせた

女流尺八家の出現

中島聖山

3回にわたって都山流の発展について触れてきたが、今回は琴古流竹友社を取り上げることとし、特に世界的に活躍した人物に焦点を当ててみることにする。

都山流の場合は、各地に医者を業とするものが中心となり、同好会を組織して、中央から専門師匠を招聘する受け皿作りを進める一方、地元の人材は北海道に踏みとどまり、あくまで組織の底辺を支える役割に徹したのに対し、竹友社の場合は、高橋渉童や佐藤富士江などのように、より高い技術を追いつめ、自ら上京することによって自分の芸を高めるとともに、新たな一派を組織する志を達成しようとした。

こうしたことが、のちの都山流の全体主義に対する、琴古流の個人主義を形成する土壌となったのではなからうか。

琴古流竹友社の沿革

琴古流の最大会派である竹友社は、初代川瀬順輔が明治27年に創設した全国的規模の派である。

初代川瀬順輔は明治3年10月10日に山形で生まれ、17歳のとき虚無僧だった榎原三虚山に手ほどきを受けた。尺八の本格的な修業を求めて、20歳で上京し二代目荒木古童に入門し、尺八人生の第一歩を踏んだ。

明治27年に竹友社を創立するとともに、南日本を虚無僧行脚し、明治35年からは東京麹町区富士見町に教授所を開設して、本格的な

門人の育成にあたった。

兄弟子だった東京音楽学校の上原六四郎（虚洞）に符点式楽譜の表記法を学び、大正2年には符点式琴古流尺八楽譜を出版した。折しも大正時代の邦楽ブームと楽譜の出版とが相まって、竹友社は急速な勢いで全国に普及することとなった。

大正14年までには日本全国は勿論のことながら、北は中国大陸や千島・樺太・朝鮮半島から南は台湾まで、231名の師範が各地で教授所を開設し、楽譜による門人の育成にあたった。

大正13年に渉風社を結成した高橋渉童は、当時専門師範として東京で活躍していたし、のちに渡道し北海道の竹友社発展に寄与した関段敏男は、台湾の台中市で特志師範として活躍していた。

北海道では函館の阿部凶介や小樽の池畑初三郎・尾山紫重・大泉正一（室蘭から移住した。旧姓統治郎）、札幌の斎藤玉洞、網走の井上正夫など11人の師範が、都市を中心に活躍していた。特に斎藤玉洞は北海道における唯一の専門師範として、全道各地に出張稽古をするなど、広範囲な活動を展開していた。

しかし、これら師範名簿に名を連ねないながらも、それ以上の活動を展開している人物が2人いた。その1人は北海道大学農学部教授で「尺八博士」の異名で呼ばれた松村松年博士であり、もう1人は女侍で世界を驚かせ

氏名		都市	資格
阿部	凶介	函館	特志師範
池畑	初三郎	小樽	〃
尾山	紫童	〃	〃
大泉	正一	〃	〃
斎藤	玉洞	札幌	専門師範
阿部	登吉	〃	特志師範
阪口	實	旭川	〃
三浦	信三郎	〃	〃
稲村	光三郎	夕張	〃
井上	正夫	網走	〃
斎藤	信一	稚内	〃

竹友社師範分布状況（大正14年10月現在）

た室蘭の女流尺八家、佐藤富士江である。

女流尺八家の誕生

江戸時代に尺八が普及宗の宗器として扱われるようになってから、尺八は男性独自の楽器と思われてきた。しかし、実際には古くから女性のなかにも尺八を演奏する人達がい

た。慶応3年に発行された「尺八名家懇望人記」には、大阪に2人の女性尺八家が存在したことが記されている。また、明治4年発行の「尺八名家懇望人記」には大阪2名、兵庫2名、備後3名の計7名が記載されている。従って、これら女性尺八家に教授を受けていた女性も含めると、相当数の女性尺八愛好家が存在したことになる。

さて、それでは北海道の女性尺八家の草分けは誰なのだろうか。明治時代の資料がないので正確なことは分らないが、大正の終わり頃に室蘭で女流尺八専門道場の看板を掲げた佐藤富士江ではなかったか。

彼女は女子大を出ているインテリであり、西洋音楽に精通していて、チェロの演奏家でもあった。当時、女性の身で大学を卒業し、しかも洋楽器を演奏できたとなると、西洋崇拜者のように思えるが、彼女はそうではなかった。彼女は柔道や剣道の武術にも秀でていた。いわば今でいうスーパーレディーで、

日本舞踊のお写真なら(ポーズ、舞台)

藤本写真館

(各地出張撮影も致します)

〈スタジオ〉 札幌市豊平区平岸4条4丁目4-10 TEL821-3515



好奇心の旺盛な体格のいい女性だった。

大正6年頃、東京で大学時代に尺八を始めたらしいが、本格的に活動したのは大正11年、室蘭に帰ってからである。

女性が尺八を始めた動機

男女平等が一般化した現在でも、女性が尺八を始めるとは相当な勇気があることだと思うが、大正初期にあつては本人自身はともかく、周囲の抵抗が大きかったに違いない。そうしたなかで彼女が尺八を始めた動機は何だったのだろうか。

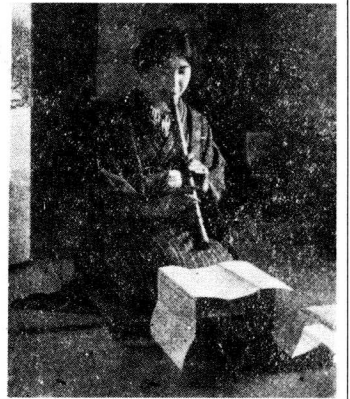
まず彼女は尺八を一つの楽器として捕らえ、男女の区別なく誰でも楽しめるはずだと考えた。もし、尺八が女性の能力を越えたものであるとすれば、婦人の能力問題にかかわることであり、可能かどうか真相究明のため是非とも挑戦してみなければならぬと決心したのである。

単なる負けん気と興味本位で始めた尺八だったが、5年ほどで自分のものにしてしまうと同時に、尺八の魅力に取りつかれてしまったようである。

彼女は尺八を唯一の友と表現し、「夏は溪流に涼を得、また月明かりには海辺を逍遙しながら、ある時は湖水に舟を浮かべながら、また秋には満山の紅葉を眺めながら、あの哀調を帯びた独特の旋律は随所で私の心を慰めてくれます」と、まさしく尺八三昧の日々を吐露している。そして、尺八を吹いている間は、俗界のすべてからのがれて、無我の境地に入ることが出来るまでになったと精神面の充実を訴えた。

彼女の勇氣ある挑戦の結果、尺八は女性にも演奏可能であることが実証された。そして、稽古を重ねることによって、男性に負けない大きな音を出すこともできる確証を得たのである。

それではなぜ、女性の間に尺八が普及しないのか。この点についても彼女は究明した。その結果、1つには女性には不可能だとする先入観があること。2つには男性ばかりの中に、若い女性が入っていないこと。3つには女性は体力がないので続けられないこと。以上3点を普及の阻害要因として掲げなが



吹奏中の佐藤富士江女士

ら、女性が尺八をした場合の効用として1つには趣味の上から、2つには体力増強の上から、3つには美容の上から、是非とも女性に勧めたいと力説した。

尺八の稽古がなぜ女性の美容に良いかという、尺八を吹いていると頬の筋肉が発達して、年をとっても頬がこけないからだと言っている。また、夜道を一人で歩く時などの護身用として、尺八は最適であるとも言っている。

彼女の尺八に対する挑戦は、当初の目的をはるかに越える大成功に終わった。

女流尺八専門道場の開設

北海道時代の彼女の活躍の様子を伝える資料はほとんどないし、彼女のことを知っている人もいない。

限られた資料を基に推測してみると、彼女の父である佐藤富太郎の尺八の影響を受けた佐藤富士江は、大学時代に東京で川瀬派の尺八を勉強した。

室蘭に帰郷した後、地元竹友会に入り、父と一緒に合奏研究会などに参加していた。

当時、室蘭には三宅竹風が創設した室蘭竹友会があり、有志が集って研鑽を積んでいた。しかし、会主の三宅竹風が修業のため、師を求めて上京したことから、その後は宮田竹齢が会をまとめていたが、宮田竹齢も仕事の関係で樺太へ転勤してしまい、彼女が室蘭に帰ったときは、活動を支える人物がいなかった状態だった。

彼女は消滅状態にあった竹友会を建て直すとともに、有志を集めて合奏研究会等を始めた。

合奏研究会は地元の糸方である藤原社中の

協力を得て、毎月一回開催されていた。次第に会もまとまりを示し、大正11年1月7日には室蘭市公会堂で竹友会の新年演奏会が開催された。会には佐藤親子のほか、高橋紫重や久慈治信、続治郎など12人が参加して、盛大に行われた。

また、大正11年7月20日に佐藤宅で行われた佐藤富士江主催の研究會では、彼女は琴古流本曲「鹿の遠音」を独奏した。

流れに乗った彼女は、持ち前の積極性を活かし、次々と独創的なアイデアを実現していった。秋には鈴蘭会を組織し、女性尺八道場を開設した。大正12年の雑誌「三曲」に女流尺八専門道場鈴蘭会として、年賀広告を出している。また、同年1月14日には、室蘭市公会堂で第1回目の鈴蘭会の演奏会を開催した。

謹んで新年を賀し奉り候

鈴蘭會 (女流尺八専門道場)

佐藤富士江

北海道室蘭市幸町九

年賀広告

当時、どの程度の女性の門人が集まっていたのか分らないが、彼女の思うようには行かなかったであろう。彼女は春になるのを待って上京した。と言うのは、大正11年5月6月号の雑誌「三曲」に投稿した「私が尺八を始めた動機」に対する反響が大きく、特に東京方面からぜひ尺八を勉強したいという女性の声が多かったからである。室蘭にいるより、上京すればたくさんの女性の門人が得られると判断したのである。

彼女はまた尺八普及の糸口を、尺八による西洋音楽の吹奏によって求めようとした。尺八の感傷的な音色にあったトロイメライやノクターン、セレナーデ等を取り上げ、バイオリンの楽譜を利用して主旋律を尺八で演奏した。

彼女はその後結婚し、鈴木富士江となったが、独身時代の夢を捨てず、大正14年9月からは、東京市牛込区矢来町4番地で尺八道場

SITY

■建築土木資材の総合商社

シティ・キョードー株式会社

〒062 札幌市豊平区豊平3条8丁目1番26号協同ビル
TEL (011) 811-6777(代) FAX (011) 824-5396

事業内容

- 建築一式工事、とび・土木・コンクリート工事、タイル・れんが・ブロック工事、ガラス工事・内装仕上工事、建具工事等の請負・設計・施工監理
- 建築・土木資材の販売
- 建築・土木資材及器具建具等の輸入・輸出
- 建築・土木資材並びに機材のリース業
- 砂利・砂・碎石の採取販売

を開設し、東京音楽協会を組織した。

しかし、女性専門道場ではなく、女子部と男子部の2部制とし、女性でも稽古に通いやすい環境を作ったにとどまった。

女1人欧州尺八行脚に出掛ける

結婚によって彼女の好奇心にもピリオドが打たれるかと思ったが、そうではなかった。

昭和2年、彼女は東京の道場を閉鎖して、1人欧州へと尺八行脚に出掛けた。新婚のさなかに、どうしてこのような行動がとれたのか不思議である。離婚していたのか、それとも夫の理解のもとに出発したのか等、詳細は全く分らない。

欧州旅行の目的は2つあった。その1つはチェロの勉強であり、2つ目は尺八による西洋音楽の吹奏研究であった。

彼女はまずフランスのパリに行き、そこでイタリア人の作曲家イルム・ピゾーと知り合い、オーケストラの伴奏による尺八のための曲を数多く作曲してもらった。ピゾー氏は尺八音楽に理解を示し、琴古流本曲の「鹿の遠音」や「鶴の巢籠」にも、ピアノで伴奏してくれたというから、単なる興味本位でなかったと思われる。



ヨーロッパ尺八行脚の鈴木富士枝女史

作曲家のイルム・ピゾー氏がパリの上流階級と通じていたことから、彼の紹介で伯爵邸の茶会で尺八を演奏したのが契機となり、その後はあちこちから声が掛かるようになった。

時にはドゥメルグ大統領が出席しているような会でも演奏した。

ある東洋研究家の集まりで尺八を吹奏したとき、「日本では尺八は男の吹く物と聞く。尺八は昔、侍が仇を探すために路を吹いて歩

いたものだが、あなたは外国に仇を探しにきたのか」という質問をされたという。その時彼女は「そうです。私は女の侍で柔術や剣術もやりますから、それで男の侍がやる尺八も吹くのです。そして、私の敵は現代の日本には見つからないので、こうして西洋まで探しにきたのです」と言ってみんなを笑わせたという。

夏にパリ郊外で日本祭があったとき、彼女は招かれて尺八を吹いたが、それだけでは収まらず、振袖に白たすき、鉢巻といういでたちで真蔭流の剣の型を披露し、集まったフランス人を驚かせた。

彼女は常にパリを本拠地にし、チェロの勉強をしていたが、時間を作ってはドイツ、イギリス、オランダ、ベルギー、イタリア、スペイン、ポルトガル等へ出掛けては尺八を演奏した。

ベルギーの王立劇場では、オーケストラの伴奏で琴古流本曲「鶴の巢籠」を吹奏したという。

ルネッサンス時代のチェロを入手

彼女がパリでピゾー氏に師事していた時、ルネッサンス時代にイタリアの名工により制作されたチェロと出会った。当時、10万フラン(4万円)の価値があるといわれたものである。

ピゾー氏に名器ともいえるチェロを見せられてから、彼女はこれを入手すべく一念に燃えた。一年半かけて懇願した結果、ピゾー氏は「そんなに言われるなら仕方がない。私も根負けした。日本人というものは恐ろしいものだね」と言っ大切にしていた名器を譲ってくれたという。

帰国後、このチェロを弾いていたところ、音楽界の権威者ウエルク・マイステルが「珍しいチェロだ」と折り紙をつけたことにより話題になり、ついには宮内省の耳に入った。当時の宮内省雅楽部長から話があり、そのチェロは宮内省御買上となったのである。

国宝になるほどのチェロを演奏していた鈴木富士江を知る人は少ない。自分で志したことはことごとく成し遂げる、彼女の意思の強さと勇氣には驚嘆せずにはいられない。

帰国、女流尺八協会の設立

昭和7年に4年間の欧州行脚から帰国した彼女は、東京市牛込区市ヶ谷の駅前にあった市ヶ谷ビルに教授所を開設し、女流尺八協会を設立した。

會員募集

尺八音楽愛好の女性は當會へ教授は會長自ら擔任

入會希望者は毎火金曜日

(會費制度)

當協會へ申込まれたし

女流尺八協會

牛込區市ヶ谷驛前市ヶ谷ビル
電話 牛込二九五〇番

會長 鈴木藤枝

全然しるうさの方でもすぐ吹けるやうになります(初心者歓迎)
尺八も備へてあります、手紙で御照會御返事致します

募集広告

しかし、門人の多くは男性であり、女性に尺八を習う違和感を感じていたに違いない。彼女が有名になり、活躍すればするほど、竹友社内の抵抗は増したであろうし、女性を売り物にしている印象を強くしたのであろう。そうした中にある彼女、彼女の独走は続いたのであった。

(以下次号)

掲載写真 日本音楽社刊 三曲 第2巻・第24巻から転載



舞踊小道具
舞台美術

近江屋

札幌市東区北36条東4丁目
☎ (011) 731-6866